

第九章 各種学校

昭和二年（一九四七）三月三十一日に学校教育法が公布され、同法第八三条第一項「第一条に掲げるもの以外のもので、学校教育に類する教育を行うものは、これを各種学校とする」の規定により、各種学校の法的根拠が定められた。当時は職業補導所や保育所等も各種学校に含まれていたが、二五年四月一九日の学校教育法の一部改正によって公共職業訓練機関（職業補導所等）は各種学校から除外された（通史編現代二第九章参照）。そこで本章では、二四年までの私立各種学校と公共職業訓練施設についてとりあげることとする。

第一節 私立各種学校

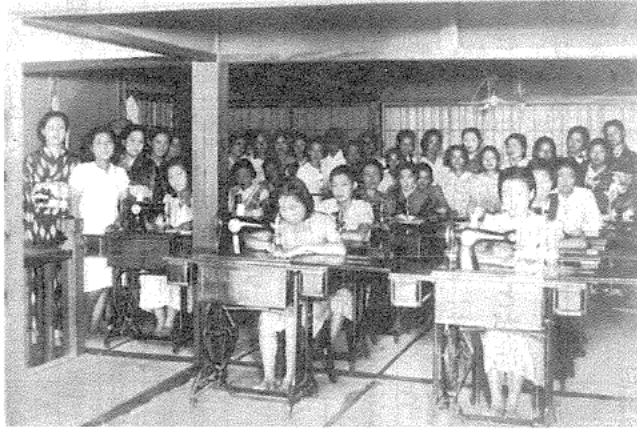
一 洋裁学校の創設

昭和二年現在の各種学校

昭和二年（一九四七）の『岐阜県統計書』によれば、同年五月三十一日現在、県に認可を受けていた各種学校は次の一三校であった。所在地と生徒数をともに示す。

・多治見商工専修学校（男二三五人）

- ・ 黒野実科女学校（稲葉郡黒野村、女七九人）
 - ・ 高山高等技芸学校（高山市名田町、女四一人）
 - ・ 中濃洋裁女学校（武儀郡関町、女一三九人）
 - ・ 岐阜高等和洋裁学園（岐阜市長良、女四一人）
 - ・ 岐阜高等服装学校（岐阜市鶴田町、女一三〇人）
 - ・ 華陽女子学園（岐阜市杉山町、女四四人）
 - ・ 那加高等洋裁女学校（稲葉郡那加町、女一五〇人）
 - ・ 高山女子高等洋裁学院（高山市有楽町、女一三〇人）
 - ・ 雛菊高等洋裁女学校（岐阜市東栄町、女二五〇人）
 - ・ 岐阜県医師会岐阜支部産婆看護婦学校（岐阜市久屋町、女四八人）
 - ・ 岐阜県自動車学校（岐阜市野一色、男六〇人）
 - ・ 美濃尼衆学校（岐阜市北長森、女一五人）
- これらの各種学校の中で、黒野実科女学校は、大正八年（一九一九）に黒野小学校の西垣校長が私宅で開始した裁縫塾を昭和一〇年に改称したもので、二三年七月に岐阜農林高校振天分校設立に伴い、生徒四三名全員をその学校に入學させて廃校となった（史現一・二〇五）。さらに、産婆看護婦学校、岐阜県自動車学校、美濃尼衆学校を除くと、多くは洋裁関係の学校であった。
- 通史編近代二第三章で詳述されているように、明治後期から裁縫女学校が設立されていたが、それらは裁縫（和裁）を教える学校であった。



那加洋裁研究所 (昭和14年)

○那加文化洋裁学院所蔵

計リ各家庭ノ衣服類ノ廢品ヲ利用シ物質愛護ノ国策ニ添ヒ普ク希望ノ婦女子ノ入学ヲ許可シ以テ洋裁技術ノ教養ニ努メ国家社会ニ貢献シタキ目的ニヨリ、昭和十四年四月那加洋裁研究所トシテ高山線那加駅前ニ於テ開所シ年々学徒ノ激増シ現在経営ノ学舎ニテハ到底新入学生ノ申込ニ応シキレズ、依テ前記交通至便ナル高農電停所北ニ壹千五拾坪ノ敷地ヲ購入シ内容ヲ充實シ完備セ

しかし、第一次世界大戦以降、一九二〇年代ごろから国民の衣生活に洋服が急速に普及していくにつれて、洋裁を教える私立の各種学校が設立されていった。以下では、これらの洋裁学校に関する設立経緯や目的、教科課程などについて判明した事実を中心に述べる。

那加高等洋裁女学校

那加高等洋裁女学校は昭和一六年六月に県の認可を受け、同年一〇月より稲葉郡那加町に開校された。同校は岐阜県で一番最初に認可された洋裁学校であった。設立者は浅野傳一である。同校の設立認可申請書(昭和一六年五月)に記された内容から設立経緯を読みとることができるので、以下に示す。

ル而モ理想的ノ女学校ヲ建設シ御認可ヲ請ハントスルモノナリ

ここから、生活改善との関わりで「服装ノ簡易化」が時代の要請となり、「洋裁技術」が女性に求められた教養であったこと、一四年四月に那加洋裁研究所を「開所」したが、洋裁を学ぶ希望者が「激増」したことにより、高等洋裁女学校を設置するに至ったことが分かる。

同校の目的は「一般婦女子ニ必要ナル新時代ニ適応セル文化的服装ヲ研究シ之ニ関スル知識並ニ學術技芸ヲ教授シ併テ着実勤勉ナル習慣ヲ養ヒ気分ヲ矯メ質実温健家庭ニ於ケル生活改善ヲ計リ副業ヲ指導シ堅実ナル主婦トシテ各業務ニ励ミ進ンデ国家ニ貢献スベキ婦女子ヲ養成スル」こととされ、生徒定員は本科八〇名、第二本科(夜間部)六〇名、速成科三〇名、研究科二〇名であった(史現一・二〇三(三))。当初の「学科目課程及毎週教授時数」を図表9-1に掲げる。

図表9-1 学科目課程及毎週教授時数(昭和一六年)

種別	科目		修身	ミシン分 解及修理	裁縫 理論	裁断 理論	製図 理論	技芸及デザ イン理論	実習	時数計
	本科	速成科								
本科	一	一	一	一	六	六	三	一	一八	三六
速成科	一	一	一	一	七	七	五	二	一三	三六
第二本科	一	一	一	一	二	二	二	二	一〇	一八
研究科	一	一	一	一	二	三	一	三	二六	三六

那加高等洋裁女学校は、昭和一九年五月から二〇年一〇月まで校舎を中部地方監視訓練所に貸与していたため休校していたが、二一年四月に再開した。二二年一二月現在の生徒定員と修業年限は、本科三〇名(一年)、速成科八〇名(六か月)、師範科五〇名(六か月)、研究科三〇名

(六か月)で、「学科課程」は図表9-1-2のようであった(史現二・二〇三(二))。

図表9-1-2 学科課程(昭和二年)

教授科目	各科毎週時数			
	本科	速成科	師範科	研究科
洋裁縫	二六	二六	二六	二六
被服	一	一	一	一
英語	一	一	一	一
修練	茶道、花道	二	二	二
計	三〇	三〇	三〇	三〇

戦後には「修身」(週一時間)と「ミシン分解及修理」(週一時間)がなく
なり、それにかわって「英語」(週一時間)と「修練(茶道、花道)」(週一
時間)が行われていることが注目される。この学校の教員である浅野たね
の手記を以下に引用しておく(『かかみ野の女性たち』)。

わたしの人生は、洋裁学校一辺倒の生活でした。大正二年八月に稲葉郡蘇原村
三柿野野村で八人きょうだいの五女として生まれました。

わたしは昔の花嫁修業の女学校を卒業して、和裁、お茶、お花、琴などを一通
り習っていました。洋裁は全く無知でした。昭和十三年五月に結婚しました。
夫は「これからの女性は洋裁が出来なければならない。洋裁ができる人を育てよ
う」という考えから、わたしを名古屋の洋裁学校へ通わせてくれました。そして
翌年の四月那加洋裁研究所を開設しました。当時は、洋裁の先生を頼もうとして
もありませんでした。幸い親類の方に大阪の文化洋裁学校を出られた方があり
ましたので二人で指導に当たりました。

そのかたわら、週二回洋裁の権威といわれていた小澤洋裁研究所で、流行の最
先端の洋裁教育の指導を受け、春休み・夏休みには東京文化服装学院へ新鮮なセ

ンスを採り入れるため講習に出掛けたり必死に研究を重ねました。(略)

戦後は入学希望者がどんどん増え、定員百六十名の所へ四百人申込みがあり廊
下に机を並べ、二階にも拡げましたが先生が足りず困りました。クラスを昼間、
夜間、日曜に分けて対応しましたが、休日が無く洋裁、洋裁で追いまくられまし
た。その上、決まった教科書が無く講義内容は雑誌や東京の講習での資料などを
参考にして作らなければなりません。夜間の授業が九時に終わりそれか
ら講義のための教材研究、資料作りと深夜まで頑張らなければならず苦しい毎日
でした。

共成高等洋裁女学校

共成高等洋裁女学校は昭和一六年九月に県の認可
を受け、同年一月より岐阜市本郷町に開校され
た。設立者は浅野まさ子である。

同校の目的は「家庭ノ主婦トシテ将又女子ノ職業トシテ時代ノ要求ス
ル洋服裁縫並ニ之レカ付随スル手芸ノ知識技能ヲ授ケ併テ婦徳ノ涵養ニ
努ムルヲ目的トス」(学則第一條)とされた。生徒定員と修業年限は、当初
予科三〇名(四か月)、本科三〇名(四か月)、事業実習科三〇名(二年)、
師範科三〇名(一年)、夜間予科六〇名(二年)であった。入学は、四月、
八月、一二月とされ、入学資格は、予科及び夜間予科は国民学校高等科
卒業程度以上の婦女子、本科は本校の予科卒業生及び女学校卒業程度以
上の婦女子、事業実習科は本校の本科卒業程度以上の婦女子、師範科は
本校の事業実習科卒業程度以上の婦女子とされた。

翌一七年五月には、学則一部変更の認可申請書が早くも出され(同年六
月認可)、普通科(一年)、高等科(二年)、師範科(一年)に再編成され、
総定員は三倍の四八〇名に変更された。その申請書には「本年度四月ノ

入学期ニハ入学志願者殺到シ、入学願書締切期日前既ニ定員ヲ突破スルノ盛況ヲ呈シタリ。而シテ定員外ニテ入学不許可トナリシ者ハ、其ノ後補欠入学ヲ要望シ」と記されているが、この時期に洋裁学校への入学希望者がいかに多かつたかが分かる。参考までに学則変更前と変更後の「学科課程毎週教授時間数表」を図表9-13に掲げる（国立公文書館所蔵「各種学校設置廃止 第二〇冊」所収）。

図表9-13 学科課程毎週教授時間数表

(昭和一六年) 変更前

科目	課程	昼間部		夜間部	
		予科	本科	予科	本科
倫理	国民道徳要旨	同上	同上	同上	同上
理論	洋服ニツイテ概念並ニ色彩ノ原理配色		同上	補正法	同上
デザイン	総合考案スケッチ		同上	補正法	同上
人体測身	測身法		同上		同上
裁断	裁断製図法	婦人子供服基礎	婦人子供服全般	婦人服ヨリ紳士服ニ及ブ	婦人子供服全般
裁縫	裁縫実習方法解説	右ニ対スル裁縫	裁縫実習	同上	同上
経済	経済ノ常識				
初歩	器具使用法及一部分縫実習	二			
手芸	フランス刺繍及文化刺繍其他	一	応用研究	同上	
華道	挿花法一般				
華道	各部分名称分解修理法及ビ治革	一	洋服実地指導法	同上	指導法実習
教授法					
計		三六	三六	三六	三六
					一五

(昭和一七年) 変更後

この学校の名称と学科課程は一八年三月に変更され、校名は岐阜女子錬成学校に、学科課程は図表9-14のようになった。変更理由書には「戦時下日本ニ於ケル婦女子ノ教養ハ最モ急務ナルコトハ言ヲ俟タズ、之レガ良妻賢母トシテ否皇国婦女子ノ責任トシテ銃後ニ活動セシムルニハ、先ツ青年女子ノ教育ニ由ラザルベカラズ、然ルニ従来ノ如キ教育方法ニテハ目的ヲ達スルニ困難ヲ伴フ故ニ、国家及文部当局ガ新ニ樹立セムトスル教育方針ニ基キ従来ノ科目ヲ変更シ」とある（史近五・二四二）。

科目	課程	普通科		高等科		師範科	
		予科	本科	予科	本科	予科	本科
倫理	国民道徳要旨	同上	同上	同上	同上	同上	同上
理論	洋服ニツイテ概念並ニ色彩ノ原理配色		同上	同上	同上	同上	同上
デザイン	総合考案スケッチ		同上	同上	同上	同上	同上
裁断	製図裁断法	婦人子供服基礎	婦人子供服ヨリ紳士服ニ及ブ	同上	同上	同上	同上
人体測身	測身法及ビ原型補正法	同上					
書道	婦人書道一般						
絵画	線描法、幾何形体、作図、配色法						
経済	経済ノ常識						
裁縫	裁縫実習方法解説						
初歩	器具使用法及ビ部分縫実習	一〇		一一			
手芸	フランス刺繍及ビ文化刺繍其他	一		一			
華道	挿花法一般	一		一			
華道	各部分名称分解修理法及ビ治革	一		隔週一			
教授法							
計		三六	三六	三六	三六	三六	三六

図表9-4 学科課程毎週教授時間数表（昭和一八年）

科目	家政科			体錬科	国民科		芸能科		裁縫科		計	科外講演
	家事割烹	育児	保健		修身	国語	書道	音楽	和裁 裁縫裁断袴二 至ル実習全般	洋裁 国民服二至ル 裁断裁縫全般		
普通科	同上			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二	同上
高等科	同上			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	二	同上
師範科	同上			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	一	同上
普通科	一			二	一	一	一	一	二	二	三六	二
高等科	一			二	一	一	一	一	二	二	三六	同上
師範科	一			二	一	一	一	一	二	一	三六	二

変更後の学科課程は、科目として「家政科」「体錬科」「国民科」「芸能科」「裁縫科」から構成されており、高等女学校の学科課程に準じた構成にしている点が注目される。

なお、同校の終戦後の動向は今のところ不明である。

華陽女子学園は昭和二十二年一月に杉山高賢（三代目新七）と夫人の糸子によって良妻賢母の養成を目標に創設された。



華陽女子学園（昭和22年）

進駐軍の兵隊を招いてひなまつりを行う。

（「岐阜タイムス」より） ○大垣市立図書館所蔵

なっている。こうした経歴から「青年女性の教育施設創立の勧誘があった」と『華陽女子学園 岐阜女子大学三十年史』に書かれている。同書には「文部省の知友、岐阜県教學課、市学務課、教育界の先輩、市内財界有力者、市内新聞社、県市婦人会幹部など、各方面にはかったところ、みな双手をあげて賛成され、後援を惜しまぬとの確約

杉山が学園を創設したのは、後の追想記によれば、昭和一六年に高賢が財団法人お茶の水家庭寮の理事になった時、家庭寮の他の理事が「日本女子教育界の先駆者ぞろい」であり、「これらのすぐれた理事と協力して、家庭寮の運営に精力をかたむけるうち、女子教育の必要性を痛感させられた」とされている。この理事就任は理事長関屋竜吉から懇望されたとされる。関屋は大垣市出身で、文部省社会教育局長などの要職を歴任した文部官僚であった。なお、この家庭寮は昭和七年に大日本連合婦人会の施設として、お茶の水文部省分館内に関屋の計画のもとに創設されたものである。高賢はまた昭和一六年に財団法人日本青年協会岐阜県支部幹事になっており、戦後にも二十一年に岐阜県社会教育協会委員に

をえた」とも書かれている。

こうして、杉山は二一年一月一日に学園の基本規定を制定した。学園長には堀口俊子が就任した。堀口は東京女子高等師範学校家事科第一部を卒業後、岐阜県女子師範学校教諭となり、加納高等女学校教諭、岐阜市立高等女学校教諭を歴任していた。また、基本規定とともに学園の趣旨と学則が制定された。同学園の趣旨は次のとおりである。

文化新日本再建の門出に当り我が婦人に対して肇国以来未だ曾て無かつた權利が政治上に社会上に或は家庭上に与へられましたので婦人の地位は一躍して嵩められたのであります。この時に当りまして我が女性はその重大使命を自覚して眞の民主々義の理念に徹した立派な日本婦人としての教養を嵩めなければならぬのは言ふまでもありません。

茲に当学園に於きましては家庭生活に必要なる常識芸能技術を習熟して理論技術の實際化を図り以て新日本建設の爲め情操に富んだ有為な女性の養成を目的と致すのであります。

学則によれば、修業年限は一年で、入学資格は高等女学校卒業程度以上であった。二一年一月に入学した第一期入学生は一九名で、翌二二年四月入学の第二期生は五一名に増加した。また同年三月、同学園は県の認可を受けている。

二 昭和二三年以降の状況

前項では、昭和二二年（一九四七）までに認可されていた三つの洋裁関係の私立各種学校の設立経緯などを述べた。本県では、私立の洋裁学

校は昭和一六年から設立され始め、戦時中から戦後直後にかけて多くの学校が設立された。このころは認可を受けていない私立各種学校も多く存在したが、その後認可を受けるようになった。

各種学校数と生徒数

『岐阜県統計書』によれば、昭和二三年五月末現在の私立各種学校は一八校であった。その内訳は和洋裁が一一校、和洋裁榮養・工業・商工業・自動車・宗教・産婆看護婦・普通科が各一校であった。生徒数は男一九五名、女二九二九名、計三二四名であった。

二四年四月末現在の私立各種学校の学科別学校数及び生徒数は図表9-15のとおりである。学校数は四一校に増え、このうち和洋裁は二六校であった。また勤労青年の一般的教養を高めることを目的として企業内（織維関係）に設置された学校もあつた。これらの学校は、二二年度までの女子青年学校が認可申請をして各種学校に切り替わつたものである。生徒数は男二六七名、女五三六九名、計五六三六名であり、約九五％が女子であつた。

なお、二四年四月末現在、県立の各種学校八校、市立一校（岐阜市、簿記珠算）、組合立一校（揖斐郡、和洋裁）があつた。生徒数は合わせて男四四六名、女一四一名、計五八七名であつた。県立の各種学校は、第二節で述べる公共職業補導所である。

昭和二五年二月現在
種学校一覽表」を掲げておく（図表9-16）。四九校のうち約七割の三五校が洋裁関係であつた。

図表9 - 5 私立各種学校の学科別学校数及び生徒数（昭和24年4月末）

学科別学校数

	普通科	工業	自動車	簿記珠算	和洋裁	家政	宗教	産婆看護婦	合計
岐阜市	2		1		7		1	1	12
大垣市				1	2				3
高山市					1				1
多治見市					3				3
稲葉郡					1				1
羽島郡					4				4
養老郡					1				1
不破郡	1				2	1			4
揖斐郡					1				1
本巣郡					1				1
武儀郡	2				1	1			4
郡上郡				1					1
加茂郡	1								1
土岐郡	1	1							2
恵那郡					2				2
計	7	1	1	2	26	2	1	1	41

学科別生徒数

	普通科	工業	自動車	簿記珠算	和洋裁	家政	宗教	産婆看護婦	男計	女計	合計
岐阜市	女306		男63		女985		女14	女69	63	1374	1437
大垣市				男110女64	男1女358				111	422	533
高山市					女88					88	88
多治見市					女323					323	323
稲葉郡					女130					130	130
羽島郡					女441					441	441
養老郡					女48					48	48
不破郡	女506				女90	女450				1046	1046
揖斐郡					女32					32	32
本巣郡					女34					34	34
武儀郡	女368				女165	女41				574	574
郡上郡				男42女48					42	48	90
加茂郡	女321									321	321
土岐郡	男16女253	男35							51	253	304
恵那郡					女235					235	235
計	男16女1754	男35	男63	男152女112	男1女2929	女491	女14	女69	267	5369	5636

図表9-6 私立各種学校一覧表（昭和25年2月22日現在）

No.	名称	所在地	設置者又は校長	種別	認可年月日
1	岐阜ドレスメーカー女学院	岐阜市千石町	石井静枝	洋裁	昭和23.7.23
2	美鈴洋裁学院	岐阜市長住町	青木まさ子	洋裁	昭和23.7.23
3	私立丸物洋裁専門学校	岐阜市柳ヶ瀬	渡辺恭一	洋裁	昭和23.9.29
4	岐阜高等洋裁学校	岐阜市五坪町	松井孝次	洋裁	(大日本紡附設) 昭和23.10.23
5	アダチ洋裁裁断学校	岐阜市御室町	足立常三郎	洋裁	昭和23.2.26
6	雛菊高等洋裁学校	岐阜市東栄町	橋詰道子	洋裁	昭和16.6.28
7	岐阜高等和洋裁学校	岐阜市長良北町	後藤磯七	洋裁	
8	岐阜高等服装女学校	岐阜市鶴田町	神谷みゑ子	洋裁	昭和23.3.28
9	華陽女子学園	岐阜市杉山町	杉山新七	洋裁	昭和22.3.29
10	大垣高砂高等洋裁学院	大垣市高砂町	津田芳子	洋裁	昭和23.10.13
11	大垣文化和洋裁学院	大垣市俣町	平野住江	洋裁	昭和23.12
12	高山女子高等洋裁学校	高山市有楽町	石黒きさ	洋裁	昭和23.3.31
13	和田洋裁学院	多治見市本町	和田きし子	洋裁	昭和23.12.28
14	多治見文化服装学校	多治見市白銀町	林ときゑ	洋裁	
15	多治見洋裁学院	多治見市御幸町	各務和子	洋裁	
16	コロンビア洋裁学院	岐阜市元浜町	小川田鶴子	洋裁	昭和23.9.29
17	竹ヶ鼻洋裁学院	羽島郡竹ヶ鼻町	宮崎はな子	洋裁	昭和23.12.28
18	モリ洋裁学院	羽島郡竹ヶ鼻町	森たきゑ	洋裁	昭和24.3.10
19	毛利洋裁学院	羽島郡笠松町	毛利富美子	洋裁	
20	関文化服装学院	武儀郡関町	小石修一	洋裁	昭和23.7.31
21	和洋中濃高等女学校	武儀郡関町	樺山 英	洋裁	昭和23.3.31
22	砂河洋裁学院	不破郡垂井町	砂河悦子	洋裁	昭和24.3.10
23	雛菊洋裁塾	不破郡垂井町	吉川アヤ子	洋裁	昭和24.3.10
24	日本女子洋裁学校	揖斐郡養基村	河村喜一	洋裁	昭和23.7.31
25	恵那文化服装学院	恵那郡大井町	田中義太郎	洋裁	昭和24.2.24
26	中津高等洋裁女学校	恵那郡中津町	成木正夫	洋裁	昭和23.5.15
27	那加高等洋裁女学校	稲葉郡那加町	浅野伝一	洋裁	昭和16.6.6
28	蛍光高等洋裁学校	養老郡高田町	大橋寿美子	洋裁	昭和23.10.23
29	ドリヤン洋裁裁断学園	本巣郡北方町	小野慶次郎	洋裁	昭和23.12.28
30	四谷洋裁学院	高山市花岡町	小杉 和	洋裁	昭和24.8.9
31	かねまる女学院	岐阜市真砂町	養島定子	洋裁	昭和24.8.15
32	野々田洋裁学院	郡上郡八幡町	野々田伴	洋裁	昭和24.10.28
33	サミ高等洋裁学院	吉城郡古川町	樹下節子	洋裁	昭和24.12.24
34	トキワ洋裁学院	加茂郡太田町	山内シズエ	洋裁	昭和24.10.28
35	柳洋裁学院	高山市大門町	柳友之助	洋裁	昭和24.9.27
36	岐阜計理学校	岐阜市長森北一色	柳原 勇	職業	昭和23.7.23
37	岐阜県医師会附設看護婦学校	岐阜市美江寺町	飯治守一	看護婦養成	昭和13.7.15
38	妙心寺派美濃尼衆学校	岐阜市長森北一色	高林玄宝	宗教	昭和5.11.12
39	西濃高等珠算学校	大垣市竹島町	大野寛七	珠算	昭和23.8.6
40	片倉関学院	武儀郡関町	反町恒治	職業	(片倉製糸附設) 昭和23.5.6
41	中和女学校	武儀郡美濃町	平田栄次郎	職業	(美濃製糸附設) 昭和23.5.5
42	伊富岐女学院	不破郡垂井町	佐藤敏男	職業	(大日本紡附設)
43	常和高等学園	不破郡関ヶ原町	国松福三郎	職業	(大日本紡附設) 昭和24.3.31
44	片倉瑞浪学園	土岐郡瑞浪町	山田 勇	職業	(片倉製糸附設) 昭和23.10.13
45	多治見商工専修学校	土岐郡笠原町	佐倉道弥	職業	昭和21.7.9
46	郡是美濃女学院	加茂郡古井町	菱田和夫	職業	(郡是工場附設) 昭和23.4.1
47	郡上高等珠算学校	郡上郡八幡町	松本丈太郎	珠算	昭和23.7.23
48	大原女学院	加茂郡伊深村	大原千鶴子	家庭	昭和24.8.9
49	坂祝学院	加茂郡坂祝村	吉田茂雄	普通	(大建産業附設) 昭和24.12.24